

喜寿のお祝い 孫たちより

上田裕子さんは私の祖母である。とはいってもおばあちゃんという感じではなかった。それは小さいころから曾祖母の上田マリさんが私にとつての「おばあちゃん」だったからだ。またその当時、裕子さんは博士号取得のために一橋大学に通っていたし、とても活発に活動していたからおばあちゃんというには少々若すぎたのかもしれない(笑)。そんな裕子さんとの思い出はやはりジャイアンツである。私は物心がつく頃から巨人の試合を見ていたし、マリばあばも含めて三人で巨人の応援をしていたのは今でもよく覚えている。それはここ最近も変わりなく続いていて、最近は「三浦でよく巨人のプレーについて中継を見ながら「今のはダメなプレーだった」とか、「あの選手は好きじゃない」とか、「あのプレーはどういう意図があったのか」などのような小言を性懲りもなく言い合っている。ただそんな時間が野球ファンにはたまらない時間なのである。ぜひ巨人ファンの同志としてこれからも語り合っていきたいと思う。(稜・二十二歳)

裕子ばあばとの一番の思い出は、って言えるほどの印象的な思い出はパツと出てこないけど、受験期にお昼ごはんをつくってくれて一緒に食べたこととか、髪染めをしてあげたこととか、ペコのお散歩を手伝ってお小遣いをもらったりとか、日常の小さな思い出はいっぱいある。日常の中での小さい刺激をいっぱいくれた裕子ばあば。これからも裕子ばあばに色々な刺激をもらえるのを楽しみにしているね。(晴河・一九歳)

あとがき

二〇一九年四月九日に裕子さんの母のマリさんが亡くなった。九十八歳だった。裕子さんは、マリさんと人生のほとんどもと一緒に暮らした。最後は介護をして、体と心が悲鳴をあげても踏ん張ろうとしていたそんな時だった。裕子さんが七十七歳になる年だった。そのあと、裕子さんは、自分のエンディングノートを書くかと思うと言った。

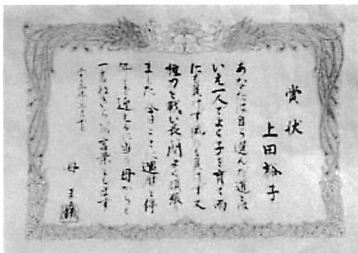
娘の私たちもアラフィフになっていて、人の人生が限りあるものだということに実感を持てる年齢になっていた。限りある人生、今まで何をやってきたのか、折り返し地点を回った今、これから何をやって生きていくのかということ、考えたりもする。

小さいころの私は、母がなぜそんなに忙しいのか分からないでいたが、母は、常に、社会と闘ってきた人だと思う。そこまで母を突き動かしているものは、何だろう。母は、目標が定まると、とにかくやるだけという感じで、闘い続ける。ミッションがあれば、他の何かを犠牲にしても突き進み、達成するという努力家だ。壁や限界を感じても、頑張ればちがう景色が見えるかもしれないと諦めない。本当にストイックな人だ。

今回、この本を出版するに当たって、今まで斜め読みにししかけてなかった母の文章を読んだ。ミッション



母・マリさん(右)と巣鴨駅頭で (2018)



母マリさんが裕子さんに送った賞状（2003年2月）



マリさんの白寿のお祝い（2019年1月）



裕子、菜生、未生、誕生会ランチ（2020年6月）

は、いつも「女性が社会で生きていくこと」と関わっていたように思う。現代社会はこうだからとか、うちの会社ってこうだからと諦めず、間違えていると思ったら、闘ってきたんだ、なんて強い人だと思っただ。

私は、母から生まれてきたとは思えないような個性を持っていて、興味の対象は社会ではなく、人間の内面に向かっている。母には、理解できない部分もあると思うが、お互い真逆の個性を認め合っていく、これからにしたいと思う。

母の人生、私の人生、あと何年残されているか分からないが、母はこれからも自分の人生を力強く歩み続けるに違いない。その姿をまだまだ見続けたい。

二〇二〇年十月二〇日

次女 菜生